

「社会主義への道」健在 共に祝う

労働大学学長 坂牛 哲郎



始めに、労働大学の「学習 反合理化 社会主義」の基調を実践的に進め、大衆学習運動に寄与するための『月刊まなぶ』が2020年8月号をもって200号を迎えたことを、読者を始め、新社会党、社会主義協会、その他全労協などの友誼団体・同志の皆様深く感謝申し上げます。

さて、労働大学が再建されてからほぼ17年が経過しました。

新自由主義政策が跋扈し、職場が資本により、或いは労働組合の右派幹部に蹂躪され、活動家と呼ばれた方々がことごとく各個撃破で攻撃される中で、よくぞ持ちこたえ、200号を迎えるまでになりました。多くの活動家も資本・労組の攻撃に耐えきれず運動から去って行ったと聞いております。このような情勢で、労働大学、まなぶ友の会の仲間たちが

健在であることは驚くべきことであり、我慢強い活動家であると思います。社会主義への道、「健在」と思っています。ひとりの同志として誠に誇らしく思っています。かくの如く述べる私は、もうすぐ100歳（今年97歳）に手が届きます。足腰が不十分であるため、労働大学事務局の仲間にかかお会いできませんが、その都度申し上げていることは「闘いつづけること」以外に労働者は生きられないと言うことです。

ここで先達について申し上げますと、マルクス・エングルス（彼は生誕200年になります）は勿論ですが、日本における社会主義運動を担ってきた人々はきわめて困難な社会情勢の中で社会主義運動に邁進してきたと言うことです。堺利彦を始め山川均、

◆ 坂牛哲郎学長・巻頭言

大内兵衛、向坂逸郎なども少数派運動から立ち上がったのです。そして生涯社会主義者でした。

このように先達を取り上げたのはなぜかです。彼らは後になるのですが、「総資本対総労働」の階級闘争の礎を築いたからです。少数派運動からの出発だったことを是非思い起こして下さい。彼らに共通するのが「唯物史観」、特に『資本論』が明らかにした労働者の運命を、階級闘争によってしか解決の道がないという確信でした。

さて階級闘争に少し触れます。資本主義社会における基本矛盾は何かと言うことです。それは階級矛盾（対立と言い換えても良いでしょう）です。資本主義には様々な矛盾が横たわっています。これらの矛盾は大衆の抵抗や運動により改善・改良されることもあります。しかし、基本的矛盾を解決したことにはなりません。コロナ騒動を見るにつけ本来の矛盾解決から遠ざかっていきます。宗教対立や民族（人種）問題も然りなのです。ではどうするのかと言うことになります。資本家階級と労働者階級の矛盾解決は階級闘争以外にないと言うことを理解して

いても、「力対力」という関係が見えなくされていきます。「総資本対総労働」の対決で明らかにされた総括は、「労働者階級が勝利する以外に基本矛盾解決の道がない」と言うことです。改良闘争のみでは解決されない課題だからです。具体的には「ゼネラルストライキ」を闘うことのできる力を、労資の緊張関係の中で労働者階級の主体形成を図っていく事です。階級間に横たわる「力関係」とはこのことに尽きます。

『月刊まなぶ』200号からの出発にあたり「愚直なぐらいで良い」、真剣に労働者階級の質的・量的強化、労働者運動の階級的強化を共にめざしていきたいと思えます。付け加えると、労働者の国際的連帯をどのように押し進めるのかです。新自由主義政策は、日本では労働者が大変無力な状態に置かれているように見えます。しかし、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカ等々、労働者階級は健在です。しっかりと労働運動に根を張った展開をし、今回の新型コロナ問題でも資本の妥協を勝ち取っています。ゼネスト突入を武器にした運動の展開があるからです。是非、国際連帯の方策と連携を心掛けて下さい。